

『創造的進化』に於ける人間存在の特質

窪田 徹

本稿は、『創造的進化』（以下、『進化』と略記）に於ける人間存在が、行動する生物として考察されている点に注目し、動物種の一つとして進化した人間の持つ、生物としての基本的な特質を明らかにする。この問題を探究する為に、本論文では第二主著『物質と記憶』をも取り上げる。動物種の一つとしての人間をベルクソンが如何に論じているかを考察する為には、同書に於いて人間の身体存在がどの様に捉えられているのかを見る事が不可欠となるからである。

まず第一章では、我々人間も又その一つである動物存在の特質について、基礎的にどの様な観点で論が立てられるのかを『進化』の内に探り、翻って、『物質と記憶』に於いて人間の神経系統の役割が如何なる発想の下に論じられているのかを検討する。これらは動物種の一つとして進化した人間が行動の見地より考察されている事を明らかにする為重要な点である。

第二章では、行動の側面から捉えた場合、動物の生命体としての特質は如何なるものか、又、動物種全体の中で人間存在が有する特殊性は何であるかを具体的に考察する。

更に第三章で我々は、ベルクソンをシェーラー及びハイデッガーの所説と比較検討する事から、人間存在の基本

的な特質に関する彼の考察をより一層明確なものとして提示したい。生命進化に於いて、人間はその存在の特殊性を、まさに八行動する生物Vとしての在り方に基づいて發達させ、複雑化させてきた。この点を本論文の結論として明らかにしたいと考える。

一、ベルクソンに於ける動物存在の主たる特質

最初に、生命進化の過程に於いて、ベルクソンが我々人間をも含めた動物存在の主たる特質を如何に捉えていたのか、という事から始めたい。この点に関しては、『物質と記憶』の関連箇所にも言及する。

『進化』に拠れば、動物及び植物が環境に存在する事の基礎的な特質について、次の如く表現されている。

「動物は、感受性 (sensibilité) と覚醒した意識 (conscience éveillée) とに依って、植物は、眠り込んだ意識 (conscience endormie) と不感覺性 (insensibilité) とに依って定義出来るのではないか」(EC, 590)

ベルクソンは又、動物にとつての意識とは、その移動活動の様々な過程に於いてこそ發生するものであり、停止状態であれば、彼等の意識は萎み込んでしまうと考える (cf. EC, 589)。

更に、栄養素を吸収する際の状態を、行動の見地よりまず考える事に依って、次の様にも書いている。

「植物は、鉍物質で直接的に有機物質を産出する。この能力の為に植物は動かなくてすみ、又感じる事さえ免れる。動物は一方、養分を探しにいかねばならぬ必要上、移動活動と、より一層豊富で明晰な意識形成の方向へと進化したのであった」(EC, 590)

彼は、『物質と記憶』に於いても、人間存在の環境に於ける感情・意識形成の基本的な在り方を考察していた。こ

ここで最も重要な用語は「イマージュ」(image)であるが、そこでは冒頭、我々人間存在の特質が、感じる事、見る事に限定された形でこの概念と人間との関連が論考されている。「感じる事、見る事に限定する」とは、いわば、人間存在の基礎的な特質を最初に規定するという事である。この観点は非常に重要なものであり、本稿の主題の基底を成すものでもある。

今、動物にとつては移動活動こそが意識を発生させるという見解に触れたが、これは『物質と記憶』に於いても既に、動物種の一つである人間を考へるにあたり、強力な基礎を成す見解として読み取る事が出来る。

同書「第七版の序文」でベルクソンは、「イマージュ」を、物と表象の中間の存在をさすものと定義する (cf. MM, 161)。更に、その「第一章」で彼は、物質及び精神について如何なる考えも持たず、又、外界の観念性・実在性に関する諸論争にもまったく無知な人間を仮定する。その場合我々は、自身の知覚器官を開いている時には感ぜられ、逆に閉じている時には何も認められない諸々の「イマージュ」を前にする事になる、と言う (cf. MM, 161)。又、我々が外から知覚に依つて知るだけでなく、内からも感情に依つて知る事の出来る「イマージュ」があり、それは「身体」としての「イマージュ」であるとも述べている (cf. MM, 169)。ベルクソンがこの様に考へる場合、最も顕著な事の一つは、「イマージュ」という概念を中核に据えた人間存在の基礎的な考察の発端に於いて、我々の身体存在が外界認識の確定的出発点とはなっていない事である。

こういった文脈での「感情」は、単純に人間の観念的要素とは考へられておらず、それも又、いわば様々な環境といつも共にある人間を構成する素因の一つとして検討される。つまり、我々の感情は、時には行動を誘発し、又逆に待機する事や何もせず居る事を促し、時には未来の為の有利な決断を指示する要素ともなるが、種々の行動状態の内、我々が主導権を持つと思われる傾向が強い感情であればあるほど、そういった感情は意識という形を帯

びてゆくと彼は見るのである (cf. MM, 169-170)。逆に、環境と共にある我々の行動が習慣的自動的な傾向になればなるほど、我々の意識は希薄な感情となり、次第に周囲の環境に溶け込んでゆく。当然、この様な人間存在の様相は段階的に想定出来るものでなく、常時不定のものであるとも彼は述べる (cf. MM, 169)。

『進化』に於ける、動物の意識形成の主要因を行動過程に置くというベルクソンの見解は、「イマジユ」という概念と共に、既にここで、その輪郭が示唆されている事が分かるが、一つの動物存在としての人間をこの様に考察する時、そこでけつして忘れてならない事は、我々人間がいつ如何なる時でも入行動する生物として見られていたという点である¹。

そして、こういった観点に於いて最も強調されるべき要素が、動物存在の神経系統の特質である。神経系については、『物質と記憶』で為されていた人間の行動をめぐる基礎的な考察についての議論の内既に言及されている。従って、これについても些か触れておきたい。

同書でベルクソンは、一般に我々は神経系について、それがまず知覚を形成し、ついで運動を創造する独立の生体機能として見なそうとする、と批判している。しかし、先程も述べた如く、彼はけつして、人間の身体存在を認識の為の確定的な基点としては考えていない。こういった発想は独自の形で次の様に表現されている。

「事實は、私の神経系統とは、私の身体を振動させる諸々の対象と私が影響を及ぼす事が可能でありそうな諸々の対象との間に在って、運動を伝達、分配、あるいは抑止する、単なる入伝導体 (conducteur) の役割を演じるに過ぎな²」(MM, 194)

彼は、人間の身体存在を、最初からコギト的な自己意識を内に含んだ存在としてはみなしていない。むしろ人間の身体というものを、いわばより一層大きな観点から捉え返そうとする。「イマジユ」は物と表象の中間の存在を

さすとされ、更に、我々人間の身体も又「イマージュ」であるとされる時、そこで最も肝腎な事は、その発想の根本に於いては、環境と人間が明白に対立してはならず、人間の身体も又、環境を構成する要素の一つであるという点にある。そしてベルクソンに於いて、神経系が知覚発生の為の独立した生体機能として見なされない限り、身体存在は常時、「伝導体」としての神経が「運動を伝達、分配、あるいは抑止する」という過程に於いてこそ、具体的に存在し得る事となる。言い換えるならば、 \wedge 行動する生物 \vee としての人間の神経系統とは、いつも環境と「共に」存在し、環境を刻一刻と構成する要素の一つである身体の一部として作動するものである。知覚を形成し運動を成立させる独立した生体機能としての神経系統が身体の「中に」存在する、といった観点をベルクソンは取る事が無い。通常、神経系の存在は眼に見えないものであるが、彼の観点では、いつも我々人間の神経系統は、 \wedge 行動する生物 \vee の特徴的な要素として環境に対してどこまでも開かれているのである。

『進化』に於いても同様の発想上に、動物の神経系統は何らかの知覚をする為の根本条件としては論考されていない。「伝導体」としての神経系統が、知覚と感情作用との仲介をつとめるのと同時に動物は周辺環境に順応するのである。いわば神経系は、大地に根を張っていない生命体が \wedge 行動する生物 \vee として存続してゆく為の重要な役割を果たすものである。

ベルクソンは『進化』にあつても常時神経系統をこういつた観点から考えている為、植物存在について、例えば次の如く述べている箇所がある。

「神経系統は何よりもまず、感覚と意志との仲介をつとめる機構であるから、植物に於いてまさに神経系に当たるものは、葉緑素の感光性と炭水化物の産出との仲介を果たす独自の機構、あるいはむしろ独自の化学変化である様に思われる。要するに、植物に神経要素はある筈がない。動物に神経と中枢神経を付与した同一の躍動が、植物に

於いては葉緑素の機能に到達したに違いなす」(EC, 592)

彼は、植物が日光に依つて炭酸ガス及び水分から炭水化物を作り出す機能を、植物が周辺環境に居座る為の能力と見なしている。環境に適合する為という限りでは、それは動物の神経機能と変わり無い様に考えられるが、動物の神経機能の場合、それは同時に彼等が行動する生物Vであるという特質を強力に表すという事を、ベルクソンは重視するのである。ここで肝腎な事は、植物生活の路線とは異なる動物存在の特質は、常時、環境の起伏に富んだ綾に適合してゆく為に様々な障害を乗り越えねばならぬ過程で發揮されるという点にある。同書にあつて言及される動物の神経機能とは、何よりもその多方面に渡る行動形態を補助するものである。

この様に『進化』に於いては、動物存在の如く、生命体の持つているエネルギーが保存に向かわず、むしろ発散の方へ向かう点が、生命体がより一層の自由度を体现する事として重視されている。そしてこれは常に、行動する生物Vとしての不安定な状況と表裏一体のものである。こういった不確定な特質も又、動物の保持する非常に強い傾向であるとベルクソンは考えている。神経系の役割は、その機能が基本的に「伝導体」として働く限り、認識の原因とは成り得ず、動物の感情や行動形態は本源的に予見不可能なものである。

ベルクソンはこれについて、「生命」(vie)という言葉を使って次の如く述べる。

「生命の役割は、物質へ非決定性 (indetermination) を浸透させる事である。不確定であり、予見不可能だという事が、生命が進化の過程で創造する形態の特質である。それらの形態が運び手となる筈の活動も又、一層不確定となり自由となる」(EC, 602)

先に、「動物に神経と中枢神経を付与した同一の躍動が、植物に於いては葉緑素の機能に到達したに違いない」というベルクソンの見解に触れたが、同時にここで、「不確定であり、予見不可能だという事が、生命が進化の過程で

創造する形態の特質である」と言われる時、そこでは「伝導体」としての神経機能をいつも保持せざるを得ない動物の主たる特質が、生命進化の過程で高く評価されていた事は明らかである。『進化』には、「生きている形態 (formes vivantes) とは、生きる事が可能な形態 (formes viables) の事である」という表現も見られる (cf. FC, 604)。つまり、唯単に生きている様に見える生物ではあっても、それは有機界に於ける種々の環境の綾になんとか順応しようと模索した果てに存在する事が可能になった様な、つまりは、本来「生きる事が可能な形態」として考えられている。しかし重要な事は、大地に根を下ろす事によって存続する事を選んだ植物存在の特質以上に、ベルクソンが、動物存在の發揮するが如き、不安定な状況と渾然一体のその特質を強調する点である。本章の冒頭で彼が、「動物は、養分を探しにいかねばならぬ必要上、移動活動と、より一層豊富で明晰な意識形成の方向へと進化したのであった」と言う事に触れたが、ベルクソンが、植物性以上に動物性を重視するのは、へ行動する生物としての特質を強く保持する動物にとって、その存続の為に必要な栄養素の獲得の場面等に於いて、動物種はいつも、多種多様な危機と表裏一体の自由を体現せざるを得ぬ形で生きている為である。

二、「生の躍動」と人間存在

『進化』に於いては、高等動物の生体機能の内、感覚・運動神経系が最重要視されている。

「高等動物 (animal élevé) というものは、およそ消化器系、呼吸器系、循環器系等の上に、感覚・運動神経系 (système nerveux sensori-moteur) が備わつたものとして表される。消化器系、呼吸器系、循環器系等の役割は、感覚・運動神経系を掃除し、修復し、保護し、出来得る限り外的環境から独立させる事にあるのだが、とりわけ、

『創造的進化』に於ける人間存在の特質

感覚・運動神経系が運動する際に消費するエネルギーをこれに供与する点にある。故に、有機体の複雑性が増加するのは（進化の偶発事に因る無数の例外にも拘らず）、理論的に言つて、神経系統を複雑にする必要のある為である」（EG, 708）

我々は前章でベルクソンが、「植物に神経要素はある筈がない」と考える点を指摘し、彼が同時に、動物性の優位を強調する点に触れた。この様な視座の展開上にあつて、高等動物に於ける感覚・運動神経系とその他の主要な生体機能との連関を論ずる時、やはり彼は、その機能に於いて「感覚・運動」の為の神経系を最も重視する。こういったベルクソンの見解では、動物にとつて「感覚し、運動する」という事は、その動物がまさに存在しているという事と同義である点が意味されている。厳密に言うならば、引用文中の如く、高等動物の感覚・運動神経系が、常に消化器系、呼吸器系、循環器系等の生体機能に依つて保護されるものである限りは、高等動物が有機界に存続しているという事は、たとえ仮にそれが一所に留まつている時であつても、常時、 \wedge 行動する生物 \vee としての特質をけつして失わない存在であるという事である。

ベルクソンは、生体の複雑性が増している高等動物にあつても、同様の見方を一貫させている。彼は、神経系に於ける複雑化の過程の要所を、「自動的活動が有意的活動に適切な用具を供給しながら、両者が同時に発達する」という所に見ている（cf. EG, 708—709）。生体を保護する自動的習慣的な神経系の反応は同時に、環境からその生体を独立させるより一層意志的で変化に富んだ行動を触発してゆく事となるのである。

こういった観点に於いて『進化』では、「動物的生命」（*vie animale*）の特質を、(1) エネルギーの蓄えを得る、(2) 出来得る限り従順な物質、つまり高等動物にあつては複雑で適応力のある生体機能を介して、多彩な方向にそのエネルギーを発散・消費してゆく、という二点に考へている（cf. EG, 709）。

環境に於いて様々な形で存続してゆく為には、エネルギーの吸収と発散は高等動物にとつても、確かにその存在の最低条件の行為として考えられる。そしてこれは同時に、存続に必要な次のエネルギーを得る為の必須の運動ともなる。同様にして、この最低限必要な運動は多様な形で継続してゆかねばならない。しかし、忘れてならないのは、この様な局面が、ベルクソンに於いてまさに我々人間もそこに大きく含まれる「動物的生命」の顕著な特質として考察されている事である。彼は、環境に於ける動物的生命のこういった運動は、いつも有限なものであり、常に思いがけぬ障害に出くわす事を想起している。「有機界の進化とは、闘争 (lutte) の展開でしかない」という述懐も『進化』には見られる (cf. EG, 710)。

この「闘争」という表現は、或る意味で生命進化の運動が如何に予測不可能で苛酷なものかを示唆する事ともなっている。生物が自らに最も適切な環境順応を模索する過程で、逆に自己の生活環境を脅かす他の生物の出現を目の当たりにした時、特に入行動する生物 \vee としての性質を強力に保持する動物にあつては、本来環境順応の為に蓄えられてきたエネルギーは、他の生物との死活を賭けた闘争に於いて消費されてゆく。まさに常時不定の動物存在にとつては、この様な予測不可能なエネルギー消費は不可避的なものである。動物にとつて、環境順応過程でのこういったエネルギーの蕩尽是出来得る事ならば避けたい局面でもあろうが、第一章で述べた如く、不安定な生物としての特質を体現し続けるのが動物性の最たる特徴である限り、言い換えれば、固定化された状態というよりはまさに流動的な傾向であるという生命の特質を、その存在に於いていつも発揮し続けるのが動物である限り、予見不可能なそのエネルギー消費は、一面的に理解される事は出来ない。

『物質と記憶』[第七版の序文]では、「生への注意」(attention à la vie) という用語に依つて我々人間の心理生活の最も基本的な特質が要約されてゐる (cf. MM, 166)。入行動する生物 \vee としての特質を持つ人間に於いて

も、この「生への注意」とはまず、他の諸々の動物と同様に、有機界へ順応する為の模索の過程で発現されるものである。我々人間のエネルギー消費も又、環境適応という最低限の水準に於いてまず行われねばならない。

ベルクソンは、このような人間が非常に柔軟な生命体として存続してこられた要因を、脳の構造・言語・社会生活という要素に見ている。

「人間は、単にその生体機能を維持するだけでなく、それを自らの思うまま役立てるまでになる。この成功を人間はおそらくその脳の優秀性に負うている。脳のおかげで、人間は無数の運動機能を構成する事が出来、絶えず新しい習慣を古い習慣に対立させ、そして生体の自動機能を細分化する事に依つてこれを支配する事が出来る。人間は更に、この成功を言語に負うている。言語は、意識を具現化する為の場である非物質的な身体を提供し、物質的な実際の身体に意識がどこまでも依存せずともすむようにさせる。そうでなければ、この物質的な身体は最初その流れの内に意識を引きずり込み、たちまちにしてそれを飲み込んでしまふであらう。人間はこの成功を社会生活に負うている。社会生活は、あたかも言語が思想を収蔵するが如く、諸々の努力を収蔵し保存する。それによつて、諸個人が一挙に登り詰めねばならぬ平均的水準を定立し、この最初の刺激に依つて平凡な人々を眠らせぬ様にし、秀逸な人々をより一層の高みへと押し上げる」(EC, 719)

先程、動物的生命の主要な二つの特性として、エネルギーの貯蔵と、従順な生体機能を介してのその自由な発散という点に触れたが、この点に関してベルクソンは、人間はこれら二つの点を、数ある生命存在の内でも高精度に、最も多方向に、そして何より、最も強い意識に依つてそれらの行為を認識出来た存在であると考えている。引用文中にある如く、ベルクソンは、人間は脳に依つて自己の生体機能の可能性を明瞭に自覚する事が出来ると考えている。それは、身体が様々な行動を展開する過程で体得した習慣に対して、人間はいつまでも無意識で居続ける

事なく、絶えず意識的に新しい習慣を自己の身体に附加し得るといふ、何より、脳を中核とした神経機能に依る生体の運動機構の豊富化を強調するものである。人間が、「生体の自動機能を細分化する事に依つてこれを支配する事が出来る」のは、環境に適應する過程で發揮される自己の多様な身体能力を不斷に自覚しながら、これを有効な経験として次に続く行動の為に役立て得るからである。高等動物の生体機能の複雑化を条件付けているのは神経系統の複雑化である、とベルクソンが述べる時、 \wedge 行動する生物 \vee としての人間の脳は最も重視すべき要素の一つとなっている。又、言語や社会生活に依つて人間存在が環境順応の地平を超出した水準に自己や他者を押し上げようと思ひ得るのも、豊富に複雑化した生体能力を人間が自分自身に対して相対化するに充分な神経系統を環境に於いて發達させ得た為であると、『進化』では考えられている。

この様に、我々人間存在は、その基本的な動物性が幾重にも纏う不安定な状態より逃避せず、環境の種々の峻に単に同調する事なく存続してきた。すなわち、人間は自己を環境に埋没させず、その \wedge 行動する生物 \vee としての機能を中核として、自らの存在能力を不斷に練磨する事で存続を果たしてきた。ベルクソンは、この様な人間の存在を、「生の躍動」(vital)が最も成す事を欲した結果の一つとして書いてゐる。つまり、生命現象が多種多様な生物にあらわれてくる過程に於いて、そうした現象が多彩な生命体の強度に依つて果たされるのを見る時、その生命現象は、一つの「躍動」(élan)として描出されるのである。

第一章で我々は、ベルクソン哲学の中に、植物存在と比べて、動物存在は、常に多彩な危機と表裏一体の自由を体现せざるを得ぬ形で生きるといふ事に、その存在の優位性を見て取つた。しかし、忘れてならない事は、我々人間という高等動物に於ける脳の機能に依つても、いつもそういった不安定性を自己自身の最大の特質として自覚出来るわけではないという事である。これに関連してベルクソンは、人間の「意識」は自己の安全の為に、何よりも

まず自分を「知性」として規定する必要があった事を考えている (cf. EC, 721-722)。同時に『進化』では、人間の「知性」が「本能」を必要とする程度は逆の場合よりも強いという事が言われている (cf. EC, 615-616)。何故ならば、有機的自然を人間の「知性」に依って加工する為には、それ以前に既に非常に充実した人間の運動機能及び生理機能が備わっていないならぬからである。又、「認識は知性の産物でなく、或る意味で事象の構成部分である」とも述べている (cf. EC, 624)。ここで言う「事象」(réalité)とは、まさに多種多様な環境そのものであり、それらと共に生きる我々人間の存在の在り方すべてを指している。ベルクソンは、人間の特質が本来不定形なものである限り、「知性」の性格を還元不可能なものと考えず、又或る意味で絶対的なものとしてもけつして措定する事がなかった。そして、この様な事はすべて、我々人間をへ行動する生物として柔軟に検討する姿勢によって表現されている。

更に『進化』に於いては、動物存在の意識の強度を、環境にあつてその諸々の動物が行動の可能性を如何に幅広く選択し得るのか、という点に見ている。

「動物界の全領域に於いて、意識は、生物が自由に為し得る選択の能力に比例している様に思われる。意識は、行為を取り囲むへ潜在性の領域 (zone de virtualités) を照らし出す。意識は、遂行されている事と遂行されるのも可能であった事との懸隔を測る。故に、それを外側より見るならば、それはへ行動の単なる補助 (simple auxiliaire de l'action) であつて、行動が点火する光であり、実際のな行動と可能的な行動との軋轢から迸る束の間の火花であると考えられるかもしれない」(EC, 647)

ここで「可能的な行動」(actions possibles) と言うのは、それが単に、動物存在が為し得た明確な行動の結果のみを重視するのではないからである。動物が為す事も可能である様な行動とは、言い換えるならば、何よりへ行動

する生物Vとして自らが存在する自然界にあつて、自己が居る環境を如何に具体的に予め認知しているのかを決定する最大の要素でもある。ベルクソンはまず、この様な動物の要素と共に彼等の「意識」を考えるのである。八行動する生物Vにとつて、環境に於ける行動の選択の幅が広いという事は、つまり、その存在者がどれ程自分が存在する領域に関して意識的であるのかを表す事ともなる。人間という高等動物が柔軟に存続してこられた要因は、脳の構造・言語・社会生活という点にあるという事を前に述べたが、中枢神経の非常に発達し複雑化した有機体である人間は、自己の様な生体機能を何よりも八行動する生物Vとして進化してゆく過程で開拓したと、考えられるのである。つまり、我々人間の神経系の発達とは、まず、行動の選択力の向上を意味し、次にそれはそのまま、人間に於ける意識の自由度の拡大に繋がると、ベルクソンは考えるのである。

動物行動学者のユクスキユルも又、生物の運動機能を具体的に検討する際、非常に興味深い論点を提示している。彼の論点は、これまで見てきた『進化』の考え方と様々な点で重なり合う。

彼は、行動を問題にする場合、そこに於ける最も重要な動物の生体器官は、三半規管であると言う³。この器官を保有していない動物も居るが(例えば、昆虫や軟体動物等)、彼は、動物にとつて三半規管は、空間の三次元性、つまり上下・前後・左右を識別する為に不可欠の機能であると考ええる。我々人間の場合、この器官は内耳に在る。ユクスキユルは更に、三半規管は、動物の身体のすべての運動がその器官の中で空間の三次元性に分解されるのと同じ時に、それはコンパスの役目をも果たしていると述べる。つまり三半規管は、いわば動物の神経の記録作業をゼロに戻し、今現在動物が如何なる位置に存在しているのかを明らかにする座標系を、絶えず生体の内に形作っていると彼は考えるのである。

三半規管の存在は、不安定な海中で生活する魚類等にも認められるものである。しかしこの器官が、環境に於け

る動物の安全な存在位置を確定する主要機能であると考えられる時、『進化』で考察される高等動物の活動に関連して、これは非常に重大な意味を持つものとなる。本章の最初、ベルクソンが高等動物にあつてその感覚・運動神経系を最も重視している事に触れたが、中枢神経系の非常に発達した人間存在にあつて、三半規管の機能の保持は環境に於いて存続する為にまさに最重要の課題となる。何故ならば、先に、「脳の機能のおかげで、人間は無数の運動機能を構成する事が出来た」というベルクソンの見解を挙げたが、人間が豊富な運動機能を活用し、環境に於いて明確な判断に基づいて多彩な行動を為し得るには、何よりもまず、その行動の発現形態に伴つて、無意識裡に出来るだけ明晰な仕方で空間の三次元性を把握する事が不可欠だからである。三半規管は、人間の内耳（耳の奥の所）に在るものだが、この器官が人間の行動に必要な基本的な座標系を形成する以上、それが外界の情報を絶えず選択する脳のすぐ側に位置するのは当然であると言える。

更にここで同時に重要な事は、人間にとつて、三半規管に拠つて触発される空間の三次元性は、いつも自己の認知形式に固有の空間として自覚されるという事である。動物存在の神経機能の発達は、まず行動の選択力の向上を表すというベルクソンの観点に既に言及したが、彼は同時に人間の空間認知について、「空間とはまず、諸々の事物に対する我々の可能的な行動の図式である」と述べている (cf. E.C. 28)。この様に彼は、環境に於いて人間が事物に働きかける上での作業を出来るだけ円滑なものとする為には、経験に依つて空間の認知を次第に概念化してゆく事が必要であると考へている。先述した様に、生体機能の自動性からもたらされるものを人間は細分化する事が出来る。人間に特有な空間認知の局面は、この点を最も顕著に表すと思われるのである。

本章では、人間存在が非常に柔軟な行動する生物として存続してきた要因を『進化』の記述より探つてきたが、これらはすべて、前章に於ける動物存在の考察の延長線上に位置づける事が出来る。

三、人間存在の基本的特質

これまで『進化』に於いて、動物種の一つである人間が行動する生物として論考されている点を見てきたが、これは単にその存在の原始性を振り返るといふ事ではない。何よりこういった考察は、自然界に於ける人間といふ存在の特殊性を冷静に検討してゆく為には非常に重要なものとなる。そこで本章では次に、この様な問題設定に関連する所の多いシェーラー及びハイデッガーの所説との比較検討を行う事から、ベルクソンに於ける人間の基本的な特質に関する考察をより明確なものとして提示したい。

一九二〇年代後半以降、後にドイツでの「哲学的人間学」(philosophische Anthropologie)の潮流が生ずる具体的契機の一つとなった『宇宙に於ける人間の地位』にあつて、シェーラーも又、人間を動物種の一つとして論じながら、人間が環境順応を繰り返す内に形成した有機界に於ける独自の位置を探っている。

同書に於いてシェーラーは、人間存在が発揮する能力を、その生理機能的な制限より遙か高所に見ている。つまり、人間の行動に於いて重視されるべき要素を、環境適応の為に備える事となつた本能的な性質の延長線上看ながらも、その地平からは最終的に峻別しようとするのである。彼は又、人間はその多彩な行動に依つて、他の動物種が埋没してしまう自然界で生ずる様々な抵抗を自らにとつて鮮明な対象となるまでに自覚出来ると考えている。これまで『進化』を中核として、人間は幾多の行動を繰り返り広げる過程で生じた意識状態に拠つて初めて、有機界を構成する無限の要素の一つでありながら、同時に自己が存する環境を自覺的に認知し得る能力をも備えるに至つたといふ事を論じてきた。シェーラーも又、多様な環境適応を模索する中で人間が自己の基本的な存在状況を認知し

得た事に、その固有な能力の第一歩を見るのである。彼は更に、人間は環境に於ける障害や抵抗を自覚する事から、必要に応じて自らの衝動を抑制し得ると考える。又、自己の積極的な行動の発露の為には押え付けていた衝動を意識的に解放する事が出来るとも述べている。これはベルクソンにも見られる、人間の行動と共に発達する意識的選択能力の向上に関する意見と共通するものである。シェーラーはそうした人間の特質を、「世界開放性」(Weltoffenheit)と呼んでいる。そして人間の本質の発現とは、この「世界開放性」へと高まる事である、とも述べている。

彼は、有機界に於ける人間の行動について最も実践的に考慮されねばならぬ状況は、生物学や心理学に依つては、けつして認識する事が出来ないと考えている。この、人間の最大の特質である「世界開放性」を検討する際、おそらくそこには多様な解釈が生じ得る様に思われる。しかしながら、ここで最も強調したい点は、シェーラーの表現する人間の特質は、自然界で生ずる種の多様性に於ける単なる一つの発現形態という枠を超出したものだという点である。彼は、そういった人間という存在の能力の可能性を、あくまで他の生物種に対して優越するものとして把握しようとする。この点は何より、ベルクソンが述べる、「生の躍動」が最も成す事を欲した一つの結果としての人間存在に強力に関連する所である。シェーラーは同書に於いて、人間も又他の動物種と同様にまず環境適応を模索し、そこに生物としての有らん限りの注意能力を傾けてきた存在であった事を考慮している。しかし同時に彼は、環境にあつて自己が未だ経験しておらぬ真新しい状況に遭遇した際、人間は、生物としての種の型にも個体の型にも当てはまらない行動を選択し得る存在である事を考えている。つまり、人間は、未体験の環境に置かれた場合、まず周囲に関する最低限の順応の為に幾度も試行錯誤をする必要がない。少なくとも人間は、差し迫つた現実を打開する為に真つ先に取るべき行為を模索し得る。シェーラーは、こういった、環境に於ける人間の真に覚醒した能

力を、人間が生物種の一つでありながらそれらとは異なる優越性を保持する存在である点に看取している。⁵⁾

そしてこれらの事は、ベルクソンが、人間の生体機能に於いて感覚・運動神経系を重視する事から、その存在が出来得る限り環境にあつて自由な意識選択を為そうとする生物へ進化したと論ずる点に重なるものである。前章では、人間が、脳を中核とした神経機能に依る生体の運動機構の豊富化の為に、有機界に於いて最も自由な行動を展開し得る覚醒した存在である事を『進化』に見た。ここでは、「生の躍動」の概念の内に人間が論考される際、まず人間について、多彩な環境的制約に於いて養分を吸収し自らを不断に維持しつつ、大多数の生物種が絡め取られてしまう多様な抵抗や障害から如何に自己を解放し得るか、という点が考察されている。ベルクソンに於いてもシェラーに於いても、生物種の一つとして進化を成している過程で、人間は自己の存する状況をどこまでも明晰に自覚する事が可能であるとされている。更に彼等にあつては、人間が、環境で自己保存の為に傾けざるを得ない執拗な衝動をも意識的に抑制する事から、ひいては所与の生物学的制約より距離を置いた固有の道を追及し得る点が示唆されている。

又、これまで述べてきた八行動する生物としての人間を論ずるといふ態度とは幾分違うが、ハイデッガーにも、人間存在の独自性を強く示唆する点が多分に見られる所がある。彼は『存在と時間』に於いて、更にその出版の二年後(一九二九年)に行つた講義の中で、両著作の表現にはかなりの相異があるが、人間存在の優位性を強調している。

周知の如く、『存在と時間』でハイデッガーは我々人間を「現存在」(Dasein)と表記している。この「現存在」の分析が、彼の存在論の基礎段階として設定されている。「現存在」は何より、自己に対する世界を自らに固有の環境として開拓し、自らが存在するという事を自覚すると共にそれを明晰に論じようと試みる事も出来る。そして同

時に、自らを取り巻く世界の存在の根柢をも問う事が出来る、といった点に、彼は「現存在」という存在の特質を見るのである。つまり、「現存在」というものの分析こそが、まず最初に主題として照射されねばならぬ優先性を持つべきものとして考えられている。

この『存在と時間』にあつては、人間存在の特異性が色濃く示されてはいるが、『進化』で幾度も見受けられる様な、生物、動物、植物、生体器官、自然等といった言葉は主要な文脈ではまったく使用される事がない。ハイデッガーは同書で、生物学的な表現を用いた解釈からは極力距離を置こうとしている。しかし、その二年後に為された講義『形而上学の根本諸概念』に於いて、彼は自らの哲学を展開する為にそれらの言葉を用いている。

ハイデッガーはその講義で、生物の諸器官は道具の如き性格を持つものでないと考えている。生物の器官が発揮する能力の独自性は、本来その存在者が一体何の為に在るのかを見出す為にこそあるとされる。そして、人間存在に特有の能力というものを主観や自己意識としてまず規定してはならないと考え、その講義に於いていわば生物学的な観点をも加味しつつ人間を大きく捉え返そうとする。しかし同時にそこで彼は、人間は諸々の生理器官を保有するという意味で動物種の一つではあるが、動物の振る舞いとはそもそも衝動的なものであり、動物はその自らの存在の中に取り込まれており、これは人間とは大きく相違する点であると言っている。ハイデッガーは、動物が常に衝動的な本能に拘束されながら生きざるを得ないという事を、動物は「世界貧乏的」(Weltarm)であると表現する。それに対し、彼は我々人間存在について、人間は「世界形成的」(Weltbildend)であると考えている。

自然が科学に於いて理論的な考察対象とされてしまうと、自然という存在は、人間にとっていわば客観的な外部世界となるが、講義に於いてハイデッガーは、人間にとつての自然はけっしてその様なものでは有り得ないと述べている。彼は、人間は自然界にいつも独自の仕方では存在せざるを得ない存在者である事を考える。ハイデッガーが

人間に於ける諸器官の能力の発動の意味を、本来その存在者が一体何の為に在るのかを理解するという点に見出すとする時、彼は少なくともその講義に於いては、動物種の一つとして存在し得る人間の、他の動物達とはあまりにも掛け離れたその認知機能の特異性を重視している様に思われる。講義では、人間のこういった独自性について、人間が実存しながら様々に関わりを持つ事柄の内ではいつか偶然に気付く事もある様なものとして考えられてはいない。それはいつも人間存在にとつて本質的なもの、とハイデッガーは述べている。自然界に於いて他の動物はその衝動的な無意識の状態に束縛され、彼等が自らの振る舞いの目的をすべて本能的な要求に向けざるを得ない限り、それらの動物は自らに固有の世界をけつて持つ事は出来ないと言ふ。そして、人間が自己保存の要求のみに常時捕らわれず、自らの為し得る行為と自らが為し得た行為をも自分自身に対して相対化出来る時、その存在は自分の居る環境を絶えず自覚的に開拓してゆく事も同時に可能となる。こういった点にハイデッガーは、人間が不斷に「世界形成的」である事の内実を見ている。

この様にハイデッガーもその著作に於いて表現の仕方に相違はあるが、人間を非常に独自なものとして強調する事を繰り返している。その論考の有り方には、シェーラーと同様、これまで見た『進化』の人間に関する論点と符合する所も多い。特にハイデッガーが、人間の生体に於ける諸器官の能力の発動の意味を、その存在者が一体何の為に存在しているのかを理解するという点に見ようとする時、そこにはベルクソンに見られる、人間が感覚・運動神経系を発達させる事から自己を環境に順応させるより以上の認知能力を次第に身に付ける様になつたという点と、非常に色濃い関連が看取し得る様に思われる。ハイデッガーが、人間は自然界にいつも独自の仕方では存在せざるを得ない存在者であると述べる際、彼は人間に於いて、いつも無意識的で本能的な行為を繰り返す事から自己を自然界にけつて埋没させようとはしない特質を考えている。いわば彼は、人間存在の特質として、自己保存の要

求からは不斷に超出した所で發揮される、自己存在と自己の存する世界についての強固な認識の形成を示唆しようとしていた事が分かる。そしてハイデッガーが、この様な人間の在り方は環境にあつて偶発的なものでなく、それを本質的なものと呼ぶ限りは、彼も又、人間存在に関する以上の様な考察を単にその原始性を振り返るといふ意味で展開するわけでない事も明白である。

しかしながらハイデッガーの場合、非常に重要な点でベルクソンと相違する箇所がある。ベルクソンに於いて、自己存在と環境に関する認識の形成は、まず、感覚・運動神経系を中核とする多様な行動の繰り返し過程で練磨されてきたものと論じられている。第一章で論考した如く、動物は自己の栄養摂取という最低限の局面にあつても環境に於いて何らかの行動を遂行せねばならぬものであり、動物種の一つである人間も又、この点は同様である。こういった、大地にけつして根を下ろす事のない生命存在である限り、『進化』では、人間はその進化過程に於ける行動の多種多様な展開と共に自己に固有の能力を複雑化させてこられたと考えられている。

この様にベルクソンの場合、際立つてハイデッガーと異なる点は、絶えず人間存在の特殊な在り方を生命進化の過程に於いて論考する事である。ハイデッガーにあつては『存在と時間』はもちろん、上述の講義でも「生命進化」という概念は何らその文脈で重要視されていない。又、動物存在の能力に於ける基本的な特質を行動の観点から持続的に検討するという態度も、顕著には見られない。先述したシェーラーは『宇宙に於ける人間の地位』にあつて、生命進化に於ける動物存在の行動能力を非常に重要視している。彼はベルクソンと同様に、自己存続の為の栄養分を自ら探しに行かずともよく、又何より、栄養素獲得の為に必要な、動物の行動機能の特殊な感覚連合や条件反射等も備える必要のない事を考えている。⁽¹⁰⁾

これまで考察した様に、ベルクソンが人間を動物種の一つとして把握する過程では、その感情や意識についての

見解、又、中枢神経系の発達とそれに伴った行動選択能力の向上や、自己の存する状況での基本的な判断能力の強化等を具体的に検討する際、彼はいつも人間存在を生命進化の途上に置いて見るのである。

ハイデッガーは『存在と時間』に於いても『形而上学の根本諸概念』に於いても、生物学や動物学が通常の自然科学の一分野として実証的研究を継続する限り、それらは人間存在の基礎的な構造分析を遂行する際の直接的な役に立たない事を述べている。¹¹『形而上学の根本諸概念』にあつては、本稿で指摘する様にならずに生物学的表现が取り入れられている事が分かるが、ハイデッガーは、人間存在に関する基本的な存在構造の分析にとつて、そこにはあくまで彼の哲学的な思索が中核としてはならない事を繰り返している。又彼は周知の如く、後に人間の実存の構造論的分析からいけば形而上学的な存在論へと、かなり顕著な形でその思索の方向性を移行させてゆく事となる。

しかしベルクソンも又、単に自己の哲学の内容を補強する為に生物学等の表現に依拠する事を繰り返していたのではない(cf. EG, 806-807)。この点は本稿で論ずる様に、生命進化の途上で人間を如何に考察し得るかを彼の思索の内に辿る事から明らかであると思われる。我々はこれまで、自然界で神経系を複雑多岐に渡つて発達させた動物存在の行動形態を植物存在に比べて、動物種は非常に積極的な特質を保持するものであり、そういった延長線上に、その存在の可能性に於いて人間のあくまで傑出した卓越性を看取出る点を『進化』に見た。「生命進化」という言葉をまったく使おうとはしないハイデッガーとは違い、ベルクソンは、この様な『進化』に於ける自己の生命進化に関する言説は実証的研究としての科学を度外視せず、むしろそれをどこまでも豊かに進展させるものとして、その限りで生物学等の表現を重視するのである。

結語

これまで幾度も論じた様に、ベルクソンに於いて人間の意識状態というものは、何よりそれが多様な行動の選択を繰り返す過程で生じた要素であると考察されている。そして生命進化に於いて、人間が、 \wedge 行動する生物 \vee として大地に根を張らず、環境適応の必要性に応じて自らの生体機能を複雑に発達させてゆくにつれて、人間は単に周辺の状態に順応するという事以上の能力を発揮し得たと彼は考えている。又そこでは、人間のそういった能力の向上は明らかに神経系統の複雑化と関連していると見られている。第一章で論じた如く、人間に於ける諸々の神経の存在とは「伝導体」として考えられていた。そして神経系統は、まず環境と共に存続する過程で発達したものであった。仮に、人間が大地に寄生する形でその存在を生かす道を選んだのなら、今日に見られる様な我々人間の神経機能の複雑化はけっして生ずる事はなかったと『進化』では考えられている。むしろ、この世界に於いて人間という形態が存在していなかったかもしれない事も又、彼の哲学の内でも考えられるのである。ベルクソンが、動物は自らの栄養素の調達という最低限の営みに於いても何らかの行動を起こさねばならないと言う点について先に触れた。彼は、その様な動物存在にとつては栄養摂取の為の活動過程でいつでも、有機界へ寄生する習慣の発生する可能性がある事を同書で見ている (cf. EG, 587-588)。この様な、植物生活の路線からなんとか距離を置こうとする人間の基本的な特質である \wedge 行動する生物 \vee としての要素を、ベルクソンは、生命進化の中で見ようとするのである。

【註】

ベルクソンの著作は、次の様に略記する。尚、頁数は全て、ŒUVRES (édition du centenaire) 5^{édition}: 1991, mai に拠る。

MM : Matière et mémoire, 1896

EC : L'Évolution créatrice, 1907

(1) ベルクソンに於ける知覚の根本的な形式を深く研究する為には、その記憶の理論に触れる必要がある。彼にあって、環境と共に生きる人間の知覚を独自のものとして多層化してゆくのは、我々各人の「記憶」(mémoire) であると考えられ得る (cf. MM, chap. II)。しかし、今般の本稿では、人行動する生物としての人間の特質に強力に焦点を絞り込む為、あえて『物質と記憶』の「第一章」に重点を置いた。この章の副題は、「身体の役割」(le rôle du corps) となっている。

(2) ベルクソンは同書「第三章」に於いて、人間存在を進化過程の「末端」(tern)、もしくは「目的」(but) として捉えている (cf. EC, 720)。そこで人間は、有機界に於いて現時点で最も高い自由度を体現し得る生命体として考えられている。この様な意味でベルクソンは、人間を生命進化の運動に於ける一つの重大な「目的」として見る。しかしそれは、進化の中で人間が予め目的論的に計画されていたという事を意味するものではない。未だ途上にある生命進化にあって、人間は今現在その過程の「末端」に位置している。

これについて、彼は次の如く表現する。

「自然が人間の為に在るのでない事はあまりにも明白である。我々は他の生命種と同様に闘っている。我々は他の生命種に対して闘ってきた。仮に生命の進化が途上で別の偶然にぶつかり、それに因って生命の流れが別の状態に分岐していたならば、我々は身体的にも精神的にも今在る状態とは相当に異なっていたであろう。これらの様々な理由から、人類を進化の運動の中で予め形成されていたものとして見るのは誤りであろう。我々は人類を進化全体の帰結としてさへ言う事はない。何故ならば、進化は多くの分岐した線にそって実現されてきたのであり、人類はそれらの線の内の一つの究極ではあっても、他の線も又、他の生命種に依ってその末端まで辿られてきたからである」(EC, 720)

(3) ユクスキユル『生物から見た世界』、日高敏隆、野田保之訳、新思案社、一九九八年、三〇―三三参照。

(4) シェーラー『宇宙に於ける人間の地位』、シェーラー著作集第一三巻、亀井裕訳、白水社、一九七七年、五〇頁参照。

『創造的進化』に於ける人間存在の特質

- (5) 同書、四〇―四二頁参照。
- (6) ハイデッガー『存在と時間』上巻、松尾啓吉訳、勁草書房、一九九〇年、二三―三〇頁、七三―八〇頁参照。
- (7) 同書上巻、八〇―八八頁参照。
- (8) ハイデッガー『形而上学の根本諸概念』、川原栄峰他訳、ハイデッガー全集29、30巻、創文社、一九九八年、三五―三七頁参照。
- (9) 同書、四三八―四四九頁参照。
- (10) シェーラー前掲書、二二―二六頁参照。
- (11) 前掲『存在と時間』、八〇―八八頁、及び『形而上学の根本諸概念』、三〇七―三三三頁参照。